

読者へ

市民の実相に迫る 努力を

民生局 保井 彰

私達が日常使っている「市民」という言葉は、はたしてどこまで市民の実相に迫りえているのだろうか。「市民」という言葉はともすれば市民社会内部の階層的な側面を欠落させる危険をはらんでいる。「調査季報」五〇号神之木台の民間アパート調査は、住環境の階層的側面を明らかにしてくれたがこの様な試みが行政内部であらゆる角度から行われる必要があると思う。また、この調査で興味深かったのは神之木台の住人の多くが「困った時には相談しあい助け

合っており、現在の住いに「親しみを持っている」と答えている点である。一方公団転出者が、公団は「人間として淋しい」と指摘するところに現在の矛盾が象徴的に現われているように思う。都市における階層分化の進行が、生活不安をもつ貧困層を再生産すると共に人間関係を破壊・疎外された生活を営まざるをえない中間層をも再生産するところに住宅問題を含む都市問題の直面している課題がある。

政治や行政は生活環境の整備だけでなく、「人間を主体にした都市政策はいかにして可能か」という問いに全力をあげて答える責務がある。それは神之木台の住民が「行政や政治に期待していない」と批判していることに答えることから出発しなければならぬ。

二番目は、長い間、役所に勤務していると役所特有の縦軸主観的行政の歯車になりがちな私達に、横軸客観的行政の必要性を教えてくれる役割りがあげられます。今日の様な複雑な都市化が進行している横浜市にとって、市民のニーズ、社会情勢の変化、各局の方向づけ等を確実に把握し、多様化しつつある行政需要に対応していくことが迫られているからです。

最近、仕事の上で思いついた

私と『調査季報』

計画局 窪田正介

『調査季報』が刊行され早くも五〇号を越えた。その間、この本が我々職員に与えた影響は、多岐にわたっていると思う。私

が、横浜市に勤務して以来、何十冊かの調査季報が机の前を通り過ぎていった。内容の大半は忘れてしまったが、なかには、今でも仕事に役立つしているものも数多くあります。

私は『調査季報』に対し、二つの役割りをみい出しております。一つは自分の考え方のマンネリ化に対するカンフル剤としての役割りです。これは、私達とはかく専門分野の情報に溺れがちで、専門外の分野に対しても疎遠になりやすく、このことが、私達のマンネリズム、狭視的思考を進行させていると思うのです。

本号の出稿が終ったところで台風一七号がきた。この台風は、日本列島に長期にわたり多量の雨を降らせ大災害をもたらした。豪雨によるあらゆる型の被害が、出そろったといわれる。

横浜市内では、九月九日に緑、港北の鶴見川流域など各地に、同十一日には、戸塚区の柏尾川流域などに浸水被害を出した。被害速報によると家屋だけみても、全壊一一部壊三五、床上浸水一、五五三、床下浸水四、一六九棟となっている。なかでも痛

ましかったのは、緑区で下校中

を複合的に利用すれば、本市にとって大変効果的な結果をもたらすのではないだろうか。一度各種図面の重要性を再認識する為にも『調査季報』で図面についての特集を行なったらどうでしょう。

が実情です。そのために、他局が利用する機会はほとんどありません。しかし、すべての図面は都市情報図としての価値は大変高く、単なる行政資料ではないと思うのです。もし、これら

へあとがき

見舞を申しあげます。

都市の川は、道路整備に比べて治水対策が遅れている。流域の開発のため、ちょっとした集中豪雨でも浸水を引きおこす。

都市の開発がさげられないとするならば、今ほど河川に対する総合的な対策が求められている時はないと思う。台風一七号の直撃で、この特集「都市のなかの川」が、押し流されないことを念じつつ、本誌をおとどけします。

〈仲田〉

*前号から、読者の意見交流の場として、「読者のページ」を設けました。本誌へのご意見、ご感想をはじめ、市政、都市問題、自治体問題等、ご自由に投稿ください。八〇〇字以内。